大木篤夫著・詩集

風・光・木の葉

アルス刊

風・光・木の葉

大木篤夫詩集

風・光・木の葉

宮澤賢治

大木惇夫著

風・光・木の葉

詩集

大木篤夫著

アルス刊

風・光・木の葉

詩集

大木篤夫著

アルス刊

恩師北原白秋先生に獻ず

「風・光・木の葉」の詩人に（序）……北原白秋
×
篤夫の印象（スケッチ）……北原白秋

裝幀……恩地孝四郎

序

「風・光・木の葉」の詩人に

北原白秋

一

生れたものの持つ本然の氣稟こそは尊ばるべきである。氣稟はおのづからにして薫る。

篤夫君。

相者は微笑して君を砂中の金と觀たと謂ふ。金は砂中にあつても光る。而も君は空しく埋もれて他の知るところとならなかつた。君の出世の機緣は容易に開けなかつた。が、然し、光るべき內質の美德は畢竟するに耀發せずして止むものでない。秋は來つた。思ふに、少くとも君の刻苦と謙抑とは禍ではなかつた。知つて、而も强ひて是等を

君に求めた私もまた幸に嚴酷の悔から免れた。これは君の歡びである。さうして私の歡びである。

無論、君は正しく酬ゐられるであらう。世はまた正しくこの俊秀なる新詩人大木篤夫の出現を確認し、更にその詩を推讃愛慕するに吝でないであらう。曩日は知らず、目下の君は最早や砂中の金ではない。

君は一つの詩星としての無垢の氣稟を君自身の詩によつて照明した。寧ろ綠金の光を。

「風・光・木の葉」

處女詩集にして未だ曾てかくのごとく整齊した名詩集を示し得た人は蓋し稀有であらう。君は自重してよかつた。今日の榮譽こそ多

年の蟄伏の賜である。而も贏ち得たそれは一に君自身の實力に由るものでなくて何であらう。一朝にして擡頭した新進の君の詩が、既に風體として寧ろ老熟の境に庶幾いものにさへ看得る事に於て、世人は如何に瞠目するか。殆どは異數として讃嘆措かざるものがあらう。その手法に於て、姿態に於て、あまりに疵瑕無く、あまりに完成された點に於て、或は何等かの嫉視と反感とを惹起することもあらうか。私の些か愁ふるところもここにある。後來君自身も顧みて、青春の放肆と絢爛期の才華とを半ば自ら強ひて掣肘した遺憾と寂寥とを或は見返る日があるかも知れぬ。かく云ふは君に對する私自らへの反省である。私の進言が或は矩を踰えは爲なかつたか。私はそれを恐れるのである。

然し、美を濟すに完きより如くことはない。而も此集は此集としての完きを遂げた。また修業の發途に於てはかかる恭謙と凝念とから己れを堅固に持するは止むを得ないものである。之をなほ敢てする若き行者は少ない。君はよく堪へた。さうしてまたその爲めに何等かの囚はれた傾きも持つたであらう。然し、得るところは失つたものより大きかつた。この歡びをまた私の歡びとする。また私自身の救とする。

善し、祝福は君の上にあれ。

二

詩は詩として正しくあらねばならぬ。詩の道を己れの道としてその行歩に徹するがまた、正しい詩人の大義であらねばならぬ。詩の信に入る者の覺悟は詩を體して微塵動いてはなるまい。

詩には詩の正しい質・格・律といふものがある。猥りに破るべきでない。修むべきは修め、磨くべきは磨かねばならない。定型の中に却つて内律を整へ、不自由に眞の自由を知り、而も破るべきは初めて破るべきである。格あつての出入であるからである。

方今の詩と稱するものの多くは粗笨な惡文でないことはない。亂

雜な表現を以て内律さながらの自由詩の表現と爲す者も、更に深く心を潜めて、その所謂内律なるものが果して詩のそれとして洗練されたものや否やを省みる必須の大事を忘れてゐる向きも少なくはなからう。またその放埒な表現が果してその内律に添ひ得たものかも亦自ら必ず査覈すべきがまことである。然し、それほどの詩境と技法とは整齊した詩の格律に就て、當初より眞に苦しまない人には到底達し得べきでなからう。私は決して近代の自由詩を肯ぜぬほどの固陋者ではない。寧ろその作者の一人である。兒童には特に眞の自由表現を奬めてゐる。而も或る一派の所謂自由詩と僭するものを、自由ならず徒に喧騷なりと爲すのは大いに故あるのである。

詩の大義は說話ではない。演繹ではない。詩の味ひは詩として表

現せられた言葉以外の如何なる言葉を以てしても、たとへば單に一つの剩語を以てしてさへも解註し得べきでない。詩はさながらの香氣と氣品とをその詩その言葉にのみ滿たす。詩は匂ふ。說くものではない。世に淺薄にして饒舌なる說話詩の如何に夥しいかは知る人は知つてゐよう。

詩の香氣と氣品とは眞純な詩人の稟性と、練磨された境涯と、技法の妙趣とから來る。言外の餘情はおのづからに匂ふ。隱約と云ひ幽韻と云ふも、寂と云ひ栞と云ふも、詩の心と言葉とをゆるかせにしては、決して他の心頭を撲つべきでない。

世のまた詩と見るものには詩ではあつても低卑なものが多い。詩らしい粉飾を詩のこよなき姿容とするが故に、眞のよき詩に對する正

しい理會が爲されぬのである。空華は淨華でない。比喩隱喩の複雜光に美粧された假幻は完き象徵ではない。詩の幻術は一に觀照の實あつて初めて虛に滿つるのである。

四年前、君が初めて一册の詩稿を携へて私に訪れた時、可なりさうした甘美な假幻境に自己を漂蕩せしめてゐたらしい君を見た。而も君の天稟と才情とはなみなみならず私を驚かした。これは奇緣であつた。殊に「想ひかすかにとらへしは風に流るる蜻蛉なり。」と云ふ君が一篇の「小曲」を發見した時、私は案を拍つてまた君を驚かした。意外の歡會であつた。さうして君の爲めに君の詩の爲めに早速の祝杯が擧げられた。二人はすつかり亢奮して殆ど夜の更闌くるまでも屋根裏の詩談に熱中した。だがその夜から、君の激越な藝術的感動はまた

一方に君の想念を極端に畏縮せしめたかと思はれる。私の賞讃は非常だつたが、私の他のまた批判はあまりに嚴に過ぎたかも知れぬ。爾後君は半ヶ年といふもの全く詩作を絶つて了つた。然し、この沈默の苦行によつて君は目ざましく轉身した。新風の君の詩篇が續々と生れて來た。

鋭く、常に君は私の心扉を敲きに來た。君ほど敲いて私に多くを語らせた人は少なかつた。私は私の詩の信條に據り些の遠慮なく君を苦しめた。それは一つは全く私自身を鞭撻することであり、私自身を救濟することであつた。

君は素描から遣り直した。今日の君の手法の堅實性は日夜に亙る素描の刻苦から來ないで何であらう。一時君は以前の自由さを殆ど

失つたかのごとく見えた。然し、君の觀照は愈々實に卽して來た。

私達の間は日に增し緊密の度を加へた。詩を通じて人としての牆壁は取り除かれ、善くも惡しくも私達は規を一にして了つた。愛着以上のものが二人の靈魂を震憾した。ただ私が切々として恐れたのは詩以外の或は私の弱所惡德のそれらを君に露はに見せ過ぎた後に起る影響の如何であつた。私は時に一言一語をもゆるかせにされなくなつた。その爲めの私の苦しみが來た。

或る人のごときは抒情詩人大木篤夫を目して北原白秋の創作だと爲した。これは穿ち過ぎる。成程、君は私の詩の精神を觀、私の詩の道とするところを信じ、私の道途を以て君の發途とした。恐らくまた君ほど私の現在の境涯を理會するに深切に而もまた慧敏な詩友はある

まいとさへ歡ばれる。君は私を知己としたが、私はまた君を私の善知識とする事に於て同種同血の親愛を感じずにはゐられなかつた。今後には、私の信條とするところを以て却つて君より教へらるる矛盾さへ生じはせぬかと微笑される。實際私の周圍に於て、君ほど私の詩の根本義を味識し體系としての流通をその詩の上に引いてくれた同朋は無い。私は君のごとき逸才を私の後に得た事に於てまことに限りなき爽快を覺える。私は寂しくない。私は安んじて一圖に進み得る。君をも勞せしめて禍とせぬ。

ただ、私は私、君は君である。個々の天稟はおのづからにして香階を分つ。個の獨自性はあくまでも個のものでなければならぬ。遊行の道こそ一つであれ。信念こそはまた等しけれ。官能の主體、靈魂の

所有者は遂に別個の二人であるからである。その二人の境涯も身香も氣韻も品質も決して同一では無い。詩は單に觀念の道ではない以上篤夫が白秋の轉身とはどうして云へようぞ。同質同型の繭ですら個は必ず個の蛾を放つ筈のものではないか。事實に於て、君は既に一の特殊な存在であることを君自身の詩を以て闡明してゐる。

改めて君の詩風を考察して見よう。

三

君の詩は清々しい。さうして而も燐光の淡青色を潜めてゐる。また杏や梨の香ひがする。君の感覺小景には雪中に光る螢の氣品があ

る。柔軟で纖細で、而も粘り強い蜘蛛の糸の光澤はまた、君の身心にも詩の韻律にも見られる。

君は消えも入りさうに寥しくなる。ただほのかな淺綠の眞實に縋る。

一すじの草にも
われはすがらむ、
風のごとく。

かぼそき蜘蛛の絲にも
われはかからむ、

木の葉のごとく。

蜻蛉のうすき羽にも
われは透き入らむ、
光のごとく。

風、光、
木の葉とならむ、
心むなしく。

君の天禀は如何にも素直に、如何にも透明である。幽かな風聲せぬ落葉、露めく光、さうした風、光、木の葉のやうにも顫へ易く搖れ易きはま

た君の感受性である。君の詩の手觸は黎明の白樺、青山椒の濕り、また
は早春の辛夷、咲きかけの野茨の陰影であり、君の韻律はまた蒿雀のご
とく清新に、遠い葦間の葭切のごとく羽搏き澄む。君の憂鬱はまた酸
性の反應を示す。而もその憂鬱は何と云つても薄明のほの青い而も
凉しい幻燈畫中のものである。雪はまたその中にちらちらと舞ふ。
燈が點る。靈性の瞳が。

君は若い。技巧の老成にかかはらず、氣品は常に恭ましい青年の純
情から明るく寂しく透る。君は暗愁に閉ざされた北國人の型ではな
い。南方の鮮麗な瀬戸内海の潮色に惠まれた熱と慧の都會人である
が、未だこの激越性はその詩には蓄へられて、他の一面に於けるかの酸
性の憂鬱と、清楚な才思と、謙抑と細心とが、先づ今日の詩風を成さしめ

たと云つていい。簡潔に云へば典雅な風光の中の一本の椶の花であ
る。

慾を云へば、一層の深處に心を潜めて、常に圓かに靈性の香を燃すこ
とである。ともすると、君はその素肌に直感する外に、君の先づ趣味と
する瀟洒な綠色のレインコウトに五月の煙霧をはぢく。

君の詩の多くは短章である。然し短章の中に努めて苦しみて詩魂
を練ることは詩の要訣の第一である。短章なるが故にその規模を小
さしとして疑ふ者は遂に詩を知らぬ人と云つていい。維摩の方丈は
どうであるか。君こそよくその不自由の自由を樂しんで來た人だ。

だが、君の技法は既に整齊した。君は最早やその性情の趣くままに
自由に奔放であつてよからう。君のまだ詩に現はれない他の半面が

今後如何なる機會を俟つて、那邊に如何に展開するかは頗ぶる私の興味とするところである。

飛躍して行け。飛躍して行く君の光采を私は安んじて瞻目るであらう。

四

篤夫君。

君に「風・光・木の葉」の序文を約してから、可なりの時日が經つて了つた。此の間の君の期待と焦燥とを察すると、まことに濟まなく思ふ。大正の十三年ももう餘すところ五日しかない。私はやつと山積した

仕事から放たれて今は漸く安らかになつた。久々に外へ出て見ると、隣の廢園の梅もちらほらと白く咲きかけてゐた。小田原の春は早い。君が元ゐた谷津あたりの竹籔には紅い椿と目白との季節が賑つてゐるだらう。あの頃は君とよくここらの野山を散策したものだつた。その後も君が見ゆる度に、この周圍の風物は君の詩中のものとなつた。君は幽かな人の目にも留らぬやうな淡青い木の花などに心を寄せたものだ。さう云へば、おつつけ裏の丘の櫟林に豆んぶしの花の穗も搖れるであらう。

私は安らかだと云つた。さうだ。かうした短日のほの青い薄明の中に坐つて、私はつくづくと君の詩の氣品を感じてゐる。

篤夫君。

詩人としての最も正しく生きる道は、その日常をただちに詩の境涯と爲ることである。さうして境涯さながらの藝術を最も高い自己の表現とすることが、また最も正しいものだと私は思つてゐる。自己の詩の道にしみじみと樂しみ恍れることは大切である。私達藝術の士にとつては、この人生の苦は畢竟の苦とはならぬ。孤獨は孤獨でない。このうへにも常住の寂光に遊ぶことがこの道の無上の樂しみであらう。

今の詩壇の亂擾と喧騒とは寧ろ他界の雜音とのみ聽くべきである。目前の名聞に執し、俗情の功利に奔馳するは古への幽人達も心から顰蹙した。高雅なるべき藝苑をあまりに私する小乘の徒の卑賤は顧みぬがよい。君もよく忍從した。が、今後も正しく堪へて行かれること

と思ふ。自ら信ずる者の確乎たる守持こそは讃めらるべきである。靜かに滿を持して私達は蓄へてあらう。さうしてまた靜かに私達の行歩を移さう。

私は私のこの道この信念により、ここに改めて君の詩を正しく推奬し得ることを私の矜りとする。君の詩君の表現はまた必ずや詩の精神とするところのものを闡明してくれるであらう。私はまたこの好き機會を利用して私の平生の信條をも正しく世に示し得ることを喜ぶ。

思ふに君は私より若きこと十年である。その若さを樂しみ得る君の詩情は愈々鮮新であれ。君は祝福されてよい。

繰り返して云ふ。君のこの處女詩集「風・光・木の葉」こそは近來の名

詩集である。君は既にこの第一集によつて、當然に、現代詩壇に於ける優越した星座の一つに位置し得るであらう。

「風・光・木の葉」

今こそ君は燦とした君自身の光芒を眺めてよい。

大正十三年十二月二十五日

小田原の山房にて

風・光・木の葉

蜻蛉篇

風・光・木の葉

一すじの草にも
われはすがらむ、
風のごとく。

かぼそき蜘蛛の絲にも
われはかゝらむ、

木の葉のごとく。

蜻蛉のうすき羽にも
われは透き入らむ、
光のごとく。

風、光、
木の葉とならむ、
心むなしく。

小曲

想ひ
かすかに
とらへしは、
風に
流るる

蜻蛉(あきつ)なり。
霧に
たゞよふ
落葉なり。
影と
けはひを
われ歌ふ。

明日の花

茨の芽

聲をひそめむ、
雪の蔭より
茨の細枝は赤く芽くむに。

青木

雪解の泥になやみゐて、
ほれぼれと眺め入りけり、
路ばたの青木の木の實
つらつらと眞青なる、
眞赤なる。

明日の花

薄陽にも
接骨木の枝が白う光るよ、
殘りの雪もとけるよ、
ああ、明日の日の花を待たばや。

明かる雲

夕靄に
けぶり立つ櫻のわか木、
梢に明かる一ひらの雲。

雪折れの竹

雪積みて、
青竹の
折れたる儘の艶やけさ、
薄陽の藪の深さよ。

雪後

雪晴れて
藪鶯はめづらに啼けり、
ひさびさに外に出て見る
椋のこの白き幹だち。

桐の枯木

焦杉の叢立つ前に
あかりて白き桐の木の枝、
見てゐれど、ゐれど、
鳥の來てとまるとはせず。

旅がへり

枯草の丘に
うつすら落ちてゐる、　私の影、
榛の樹の影、
午さがりの何かしら飢じいおもひ、
旅がへりの疲れたおもひ。

芹の根

朝まだき、水のほとりに
ひえびえと摘む芹の
その根の白さ、
摘めども、摘めども、その白さ。

小魚

流れ藻の
ながれすく間に
ちろ〳〵と光る魚あり、
日陰れば
陰る魚あり。

こぶしの花

辛夷(こぶし)は
白き花ながら、
つくづく見れば影もありけり、
影と見えつつ
かうがうしくも寂び明りけり。

親しき花

けふ日頃こころをとめて見らるる花、
樒(しきみ)の花、からたちの花、
まめんぶしの花、どうだんの花、
なべてみな蒼みがかりて白き花、
ささやかにして忘られし花、
野山の花。

街道

村のはづれの荒壁に
赤いビラがちぎれて搖れてゐる、
青梅街道は、しろい埃の
吹きさらしです。

見慣れた風景

見慣れた風景

遠山なみは
あをぞらを流れてゐる、今日も、
煤けた赤い旗が
驛の屋根にゆらいでゐる、今日も、
孤獨に慣れた眼に、今日も。

日沒

日沒の雪の野路に、
樹のかげと私の影が
あをあをとしみこんだ、
鳥の羽ばたき、風の音、
口笛の歌まで影となつて
あをあをとながれた、
日沒の雪の野路に。

鶯笛

雪こそ解けね、
一二すん下には
草もあをあを芽ぐんでゐやうよ。
どこやら、底明るい空に、
となりの子供の吹いてゐる
鶯笛(うぐひすぶえ)の音(ね)もとほるよ。

竹馬

隣りの子等が
裏の藪から切ってつくった
この竹馬の竹の青さよ、
幼い日のおもひでに
泌み入るやうなその青さよ。

柊の花

妻よ、
となりの子供の
鶯笛(うぐひすぶえ)でも借りて來よ、
柊(ひいらぎ)の花が、寂(さび)しいといふたとて、

どうせ來る日が來なければ、
春にもなるまい。
ああ、せめて
鶯笛でも吹かうよ。

八つ手の花

冷えびえ濡れて
八つ手の花のうす白さ、
日の暮れにながめてゐれば
こころもともに霙(みぞ)るる、
葉越しに見えて動かぬ
妻の顔も笑はねば。

曇り日

投げた石が
波をすべらぬ、
いくら投げても
すべらぬ、
……あゝ、曇り日の
しらけた川。

冬薔薇

冬ばら、冬ばら、
こがらし吹けば
天翔ける鳥の翼も傷みやすきに、
冬ばら、冬ばら、
粉雪まじりの薄陽にも

しろじろと匂ふ冬ばら、
あゝ、わが心うれたくも
咲き繼げよ、ねもごろに、
冬ばら、冬ばら。

冬の菫

いろはうすけれ、菫の花の
わすれ咲き、
こぼれ實も
小春にあへばたふとさよ、
われらが冬の日かげにも
妻よ、たまには、陽も射さうぞ。

朝茶

焙じ茶の熱いかをりに
山葵漬がひりひり涼しうて
咽び入る妻のをかしさ。
空には、鳶も
ぴよろぴよろと啼きゐて。

むかし

三月來れば、かの山に
妻よ、かの日の
かの山櫨子の花は咲かんに、
疎しとにはあらね、われら、
むかしを語ることさへも
いよいよに稀れとなりけり。

ぺんぺん草

青空にひばりなくとも、
妻よ、げに、この草屋根の
ぺんぺん草はあはれなり、
吹かれ吹かれてあひすがる
この二本のぺんぺん草は。

うぐひす

うららびはきたるらし、
けふのひもめぐまれて。
しづかなるめざめにきく
あかつきのうぐひす。

珊瑚樹

あをぞらはれて
珊瑚樹の花咲きにけり、
世の隅に汝(なれ)とゐて
きよくさびしき。

朝餉

霧がふり、
こほろぎが鳴き、
静かな朝。

妹(いもうと)とすする蕃茶のかをり、
茶碗にふれる箸の音、

默つて、ほゝゑめば、
この世の隅に
生き殘された二人(ふたり)のまぼろし……

霧がふり、
こほろぎが鳴き、
静かな朝。

杉菜の頃

溝のあちら

むかうから匂つてくる、
山椒の木の芽が。

わたしは溝ぎはに立つてゐる、
さみどりの日中に。

いい娘はついと隠れる、
山椒の木の蔭に。

白い家鴨が羽ばたいてゐる、
山椒の木の下で。

わたしはいつまでも待つてゐる、
さみどりの日中に。

水馬

いい晴れである、
流れには水馬が飛んでゐる、
わたしは晴衣(はれぎ)も着せてもらつた、
いい日曜である、

野の風もふくらんでゐる、
誰かに見せたい身のかろさである、
それでもひとりで遊んでゐる、
水馬もひとりで飛んでゐる。

野の羊

野つばらはいいな、
いつ來てみてもいいな。
おや、羊があるな、
放ち飼ひだな、
だが獨りだな。
いい毛なみだな、

見てやる者もないのだな。
飢じさうだな、
だが恨まない眼だな、
俺も未のうまれだな。
おや、羊の背に紫の斑が搖れたな、
ああ、辛夷の花の影だな。
野つばらはいいな、
さびしくていいな。

ひなた

素直に日向を掘つてゐる、
そのうちいいこともある、
山蘭のしろい匂ひがする。

影

羅をきてゆく女よ、
ふりむいてごらん、
秋近い陽に
おまへの影も透いてゐる。

目醒め

いい夢を見殘して、
すがすがしいこの寢醒めに
草のにほひを吹き入れる風、
帳(かや)を透かせば
さみどりに、空も搖れてゐる。

あゝ、幽かに
朝のピアノが鳴つてゐる。
幸な、幸な漣(さざなみ)が
わたしの胸をゆすつてゐる。

遠い母に

遠いお母さん、

夜明けの雨に
お隣りの時計が鳴つてゐます、
快い音です、
遠くで、幼な兒が話してゐます、

まるで小鳥の囀りのやうです、
きつといいお母さんでしよ、操してゐます、
靜かな、靜かなその聲は
山の祭の笛のやうです。

遠いお母さん、
この家へ移つて來て、
これが初めての「おめざ」です。

母のこゝろ

夜風に
葦がそよぐよ。
よしきりがなくよ。
故郷は遠いに。
お母さの聲もするよ。

野茨の聲

遠雷

驟雨はもう、あのあたりまで來てゐる、
しづかな遠雷がして
そよぐ木の葉、
心にも幽かに反響するものがある、

いい戦きと匂ひが空氣にある、
小鳥よ、やどりをきめて鎮まれ、
慰めはあの雲に乗つてゐる。

良夜

雨は通つた、
郊外は、今、
いい濕りと風の領土となる。
葉蔭にゆらぐ灯の何たる涼しさ、
弟よ、見よ、
あの窪地の村落の

親しい家々のつらなり、
――何れも窓を開け放して
人は浴後の憩ひにゐる。
弟よ、
われらも憂ひを吹き流さうよ、
明日のことは明日にしようよ、
ほう、森のあちらがあかるんで來た、
笛もきこえる、人聲もする、
今にいいお月夜だ、
濕りと風の月夜だ。

雨後朝景

朝が來た、わたしの庭にも。
何の鳥か、
ほがらかなあの聲。

見慣れた空も、涼しくなる
松の花の

鮮(あざや)かな、しづかな穗さき。

時をりは、風もあるか、
葉もれの雫(しづく)が
砂に沁みるおもひの柔(やは)らさ。

ああ、何の鳥か、
またしても、ほがらかなあの聲、
松の花のあちらで。

五月

風はほろほろと醉ふ、
吹かれるものは
みな恍(くわう)として感染する、
南方の美しい熱病のやうに。

楓わか葉も溶けて流れて
蔭さへも螢いろに明るい、
哀歡のこころが
ひつそり點(とも)りでもしたやうに。

憂鬱な散歩

欅林に入れば
欅若葉のこまかな搖れ、
風もさみどりに溶けるあたりは
紅鶸のころもたかい。
ああ、それでも足もとは濕つて
冬のままの朽葉の層に

蜘蛛の圍がきれぎれにからんでゐる。
欅林を出れば
青空をせんせんと耀き流れる白雲、
眞近かな山が、おほらかに
海鳴りの反響をかへしてゐる。
ああ、それでも路ばたの葉がくれには
枯れた黑い木の實がのこり、
影の薄い羽蟲がうなつてゐる。

丘をゆけば
むかうの崖の櫨子の赤さ、
燃えるやうな赤さ、
ああ、それでもこの笹の根かたには
しほしほと何か幽かに
日蔭の花が咲いてゐる。

武藏野の雨

群鳥を追ひながら
どの土地を濡らしにゆく、
月の夜ごろを掠める雨、
櫟の匂ひのぷんとする雨、
武藏野の雨。

旅愁

——旅より病める者に——

變りはないか、けい子よ、

雨が降つて
この丘は日も暮れる、
海鳴りも胸に應へる。

ほら、また風だ、繁吹きだ、
野茨が散る、野茨が
暗がりに散る……

變りはないか、けい子よ、

日は暮れて風もいよいよ募つて來る、
海鳴りもいよいよ眞近かになる、
ああ、雨の中に寒い、私は。……

野茨と蜜蜂の中へ

野茨の花もよかつた、
その蜜を吸ふ蜂もよかつた、
けい子よ、この茨蜜を嗅ぐと
どうやら風祭の匂ひがするではないか、
あの白い路ばたで言葉を交はした
見知らぬ若者の匂ひがするではないか、

健康と純朴の匂ひ、
あの時の草いきれの匂ひ、汗の匂ひ、
ほんたうに光と熱の醱酵した
五月の匂ひがするではないか、
どうだ、けい子、
あの野茨と蜜蜂の中へ歸つて行かうか、
おまへの健康を、
潑溂とした「昔」をとりかへすために。——

註、「風祭」は小田原在の地名。

野茨の聲

この夕靄に溶けてゐる言葉、
白い野茨の花から
しづかに匂つて來る言葉、

これだ、この祕密だ、
ながいこと尋ねてゐたのは。
野茨よ、野茨よ、
この素朴で聲のない言葉。

白い黎明

白鷺

白鷺は
さうれいの氣をつらぬいて啼く、
地平をのぼる陽とともに。

白鷺は
羽ばたき、羽ばたく。

蘆の葉をふるはせて、
水のしづくを、眞珠のやうにふらせる。

それも束の間、
白鷺は、ひかりのなかへ
影のやうに消えてしまふ。

あかり

かうした寂しいあかりがほしい。
雪のなかに透けて、
ほのかに明かる螢のやうな。

ねがひ

あかつきの雪に
からだをあらはう、
一羽の鶴のやうに。

淨めた胸には
雪にも消えぬ火をたかう、
赤い鳥冠のやうな。

火

香あぶらを雪に注いで
凋んだ夜を薫らせよう、
たちばなの花のやうに。

また白樺の枝を燃して
瑞々しい靈氣を燻らせよう、
青い香爐のけむりのやうに。

かうして、雪の中にも火が點いたら、
互に生命の觸手を翳さう、
ほがらかな夜明けを待つために。

早春

けさの雪は、
處女の素足に
うつすら染みた蓬の匂ひがする。

けさの雪は
ゴム靴で踏みしめると
女の唇で鳴る海酸漿の音もする。

あたらしい木

しののめに
白樺の處女林に入り
あたらしい木をきれ、
汚れないものよ。

夜の霧の音樂

靈性の芽

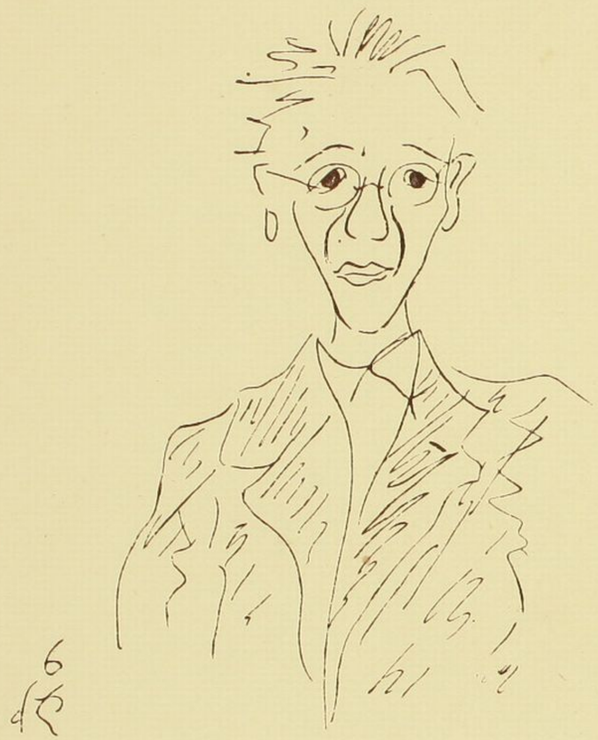
暮れがたの
あをざめた雪のやうな
このおとろへた肉體のねむりから
すい、すいと
さみどりの草がのびる、
光り、光り伸びる、

薄闇の虚ろのなかに
ながい、ながい影をひいて
ああ、噴水のやうにのびる、
暗い空のかなたに
明日が胚む
薔薇いろの光につらなるために、
肉體の翳りから、ふしぎにも
はつはつと生えて出る
この涼しい靈性の芽は。——

夜の霧の音樂

夜の霧に耳をすませば、
つめたい髪の音がする、流れ藻の
水を梳く音、
無數の絃のあひ觸れて
ふるへひろがる音がする、
揮發性の香料の

かすかに湧きたつ泡の音、
あをざめた木蓮の花びらが
霊魂の翳をうつして
ひんやりと散る音がする。
ああ、かぎりもなく幽かなる
夜の霧の音樂よ。



月夜の雪

月夜の雪のあかるみは、
むしろ大氣の影とも見える。
それは冷たい青貝のやうで、
それでどこやら、薄紅がかつてもゐる、
水に浸した石竹の花のやうに。

夜櫻

淡紅がかつた雪の中から
うれはしい春の顔を泛べてゐる、
眞盛りの夜ざくらは。

凝視

白けた月のおもてに草が生えてゐる、
青青と、あをあをと
その草がそよいでゐる、
わたしの歎息にそよいでゐる。

歎息

暮れがたの
このためいきに、
明日のおもひも曇ります、
枇杷の花までこぼれます、
あ、黄色い帆船も消えました。

映像

李の花が、ほろり、
尼僧の青い眉毛に散りかゝると、
雲の影が、深い瞳にながれる、
ほのかな妖氣がくゆる、
解けた念珠の水晶玉が

燦々とこぼれて、
乳房のあたりをかすめる、
聖水が草を濡らす、
紫の衣の裾が霧のやうに薄れる、
と、淫樂の足が媚きのぞくのだ。

祕密

うすものゝ霧にほのめく
處女の乳くびは、
曙にほころびかけた薄赤い莟、
母胎から故しらず受けついだ撰ゆい祕密の瓣、
そと觸つても生命の流れが

總身につたはる電氣のボタン、
櫻實のやうにくるくる緊ち切れて
樂欲のこころよい惱みに喘ぐ
ふかしぎな恍惚の吸盤。

戀慕と夢想

言葉

撫愛のなかの
おまへの言葉は、
薔薇いろに烟つて
香料のほめきのやうに
狭霧のなかに溶けてゐる。

わかれる時の
おまへの言葉は、
夜見る金の像のやうに翳つて
蛾のやうに羽搏きながら
落葉とともに散つてゐる。

月光と女と落葉

お聽き、
團栗の實のゑみ割れるのか、
ぱらぱら雨か、
青銅の小さな鈴か……
褐色の乾いた音がして、
ほら、樹だちから

秋の木の葉が降つて來る、
降つて來る。

ごらん、
落葉は月光のしたゝりに濡れて、
銀色の魚のやうに
閃めき、ひるがへり降つて來る、
おまへの白い頸に、胸に、肩に落ちて來る、
そして、おまへの沈默は
憂鬱な金の心となる。

女よ、
あひびきの終りの
何かしらやるせない身には、今、
ひえびえと、流れ藻のやうに霧がめぐり、
二人のさびしい影にも
月のあかりが青々と沁みとほる、
おまへの唇も顫へてゐる。

女よ、

さあ、別れよう、
月のあるうちに、互の影が薄れぬうちに。
落葉は積る雪のやうに
今に二人を埋めてしまふ。
夢みるやうな謎の眼をあげて、
女よ、別れをいふがよい、
ああ、それとも
落葉にうもれて眠らうか、

いや、いや女よ……。

夢想

無花果の葉の影黑き路上に
霧の紗をもて、
われは、月光の碎片をすくはんとする。
樹の間につるる
白金の蜘蛛の網もて、

きみはまた、月の素顏を蔽はんとする。
われら白痴のごとく
嬰兒のごとく、つねにつねに
奇しき夢をかなへんことに身をやつす。

隱れ家

髪を吹け、髪を吹け、
微風よ、
夜々の霧の流れに
果てもなく漂はせてくれ、
遠い戀人の髪を、その匂ひを。

追はるる者の如く日を怖れ、
さすらひ疲れた魂は、
いつの日か、夜の霧の隱れ家をおとづれやう、
そこに漂ふ綠の髪に捲かれるために、
孤獨な肉體に青い紗の帳をひいて
いつまでも匂ひよき夢と埋れるために……。

斷章

斷章

一

せんだんの林にひそめば
せんだんの薫り衣を染めぬ、
こころを染めぬ、
かの人をつれて來まほし、
せんだんの林の奥に。

二

憧れのこころ
みたす術なし、
いたづらに枇杷の花咲き、
みぞれ降り。

三

貧しくて麥は食めれど
きみとあふ日のあでやかさ、

柘榴水もて口漱ぐ日のあでやかさ。

四

月の夜にきみと逢へば
影うすき木はあはれ、
枯木はあはれ、
さざめ事おほふよしなき。

五

しみらにも

くちづけの匂ひとなりぬ、
月の夜の沈丁花。

六

素馨のうつり香の
指さきにほめくも、あはれ
君とわかれて、
この月の夜は
おもひも青く燻ゆる。

七

うつり香は
朝にかぐべし、
青梨いろの海のごとくに。

八

眞晝、われらの蓐となりし
金の木の葉もあをざめて、
わが蹠に濕らへり、

夜霧も湧きて流るるか、
この冷えびえと翳るおもひに。

九

せめて、蓬のにほひよ、
野の雨に
わかるゝ。

十

月の夜に
無花果の木を攀ぢて
無花果の實をもぐ男、
あはれ、あはれ實をもぐ男。

十一

杉の實の綠、
綠、綠、

綠をつぶす爽やかさ、
しんしんと山奥の匂ひぞして。

十二

はつこひ人は遠きゆゑ、
風そよぐ薄が原に
晝見し月のわすられず、
いつまでも
いつまでもわすられず。

十三

そよ風よ、
海こえてゆけ、きみが家の窓に、
そよ風よ、
きみが眠りを偸み來よ、
しのびて、しのびて
そよ風よ。

十四

光の薔薇よ、
白日の霧よ、
薫れよ、薫れ、
きみが睫毛の
ほのかなるそよぎにも。

十五

螢よ、明れ、
好色の
わが貴婦人の肌の黒子に。

十六

かりそめに、
路のほとりに
むかしの人とゆきあへば、
ただ淡く、肉桂の香ぞする、
ふるさとの海苔の香ぞする、
ただそれほどの女なり。

十七

銀座舗道に
柳の影のほろびしごとく、
なにやらさびしよ、
昔の人とゆきずりて
心にかげの殘らぬ。

十八

いかがせむ、
さかづきの琥珀の液に
ふと翳る綠の影を、

灯にくるめきて
かげろふの羽ばたく影を。

十九

濱の陽炎、
すれすれに飛ぶは羽蟲か、
うつらうつら見つ
ひとり風に吹かるる。

二十

月夜の杜に
彈けるは木の實か、
何の木の實か。

二十一

秋のまひるに眼とづれば
眠りのうへに鐘が鳴る、
ふるさとの
ふるさとの鐘が鳴る。

傷心幽情

焦心

連翹は
あをぞらに
弓形の花枝をかけたり。
撓なる花枝を折りて、
ふくらめる空を

叩かん。
何ものゝそゞろ心ぞ、
かの人の胸とも
彈みつゝ、空を鞭うつ。
鞭うてど、
虚しく
花は零れぬ、わが顔に。

空、ともなく
彌すみて
無心の日、はるかなり。

思ひ出

遙かなる思ひ出は
縋るすべなし。

せめて嗅がなむ、
青葉わか葉の陽のにほひ。

傷心

月あをむ
蘆はらにきて
聽き入るは、
海の遠音に

絶えつづく
こほろぎのこゑ。

こひ人よ、
おんみは遠く、
わが心、秋風のなかに棲む。

江波の濱邊の

江波のはまべの岩かげに
ひそみて獨り牡蠣うてば、
潮の香ふかきが泣かれけり、
けふもあはれず來しゆゑに。

註、「江波」は郷國安藝にあり、瀬戸内海にのぞめる一漁村。

あすの日も

あすの日も晴るるきざしか、
われらが戀もうらやすきか、
安藝の小富士の峰の秀に
ゆふやけ雲のあかれるは。

註、「安藝の小富士」は似之島の俗稱。瀬戸内海にあり、形富士に似る。

草寺に

草寺に侘びて住まへば
昔の花かげり咲きけり、
明け暮れにあはれと見つつ、
わがこひとともに祕めけり。

濱ひるがほ

ひとり來て、
砂に涙のしむ音を
濱ひるがほにもきかれけり。

螢

きみがその薄きなさけも、
夏くれば涼風となり
はた水となり、
夜な夜なを螢や流さむ、
きみがその薄きなさけも。

涼雨

月あかる夜を雨は過ぎけり、
さやさやに小竹もゆれけり、
螢火も流れさりけり、
きみも行きけり。

月あかる夜を雨は過ぎけり、
ぬれてわれのみ野に殘りけり。

青き果

雀の子

杉菜にそそぐさみだれは
みどりこまかに煙らひぬ、
杉菜にこもるすずめ子の
しばなく聲に日も暮れぬ。

夏野

夏野きてしじに渇けば
路ばたに桑の實をもぎ
水の邊に酸葉をさがす、
この心いとけなきより
日と共にいよよ新らし。

青き果

無花果は
わが軒に蔭をつくりて
晝の憩ひを涼しくすれども、
その青き果の

いつまでも青きは哀し、
小鳥ら日毎もとめきたり
日毎むなしう去りゆけり。

蛾

まひる野の
草のかげより
白き蛾ひとつ生れ出ぬ。

まひたちぬ、
羽搏きぬ、
影おちぬ、草の上に。
束の間に
消え失せぬ、かげろふに。

春晝

風ゆれて
野茨のかをり、
　きみの身じろぎ。
森しづもりて

蜜蜂の羽おと、
　きみのささやき。
草かげろひて
秣のほめき、
　きみのつくいき。

秋の瞳

ふるさと

朝かぜに
こほろぎなけば、

ふるさとの
水晶山も
むらさきに冴えたらむ、

紫蘇(しそ)むしる
母の手も
朝かぜに白からむ。

この朝のなげかひは

この朝のなげかひは
いともしづかにあらしめよ、
空に鳥なき、
風は木の葉にさやぐとも、
この涙
しづかに砂に沁ましめよ。

内海

濱はしづかに潮みちて
藻草も晝を薫りけり、
これかや父の、母の海、
涙ながれてとめあへず。

海とこほろぎ

大海(おほうみ)の遠鳴りのなかに
われは聽く、
こほろぎの
かぼそき音いろ。

こほろぎの音いろのなかに
われは聽く、
とどろなる
海の遠鳴り。

秋晝

けやき林の奥のあかるさ。
銀笛吹かば
すみて徹らむ。
その音いろ

深く、かなしく、
落葉にかゝる蜘蛛の巣の
かぼそき絲も、
白金いろにふるはさむ。

秋のおとづれ

秋ともならば、朝な朝なに
よき伯父の
白馬にまたがり、
颯々とおとづれて來む、
むさし野の
森のかたより
待ちわびし蹄や鳴らむ。

靜畫

地に落ちて
うごくともなし、
蜻蛉の影は。

草の實

草の實が
パチリ、彈(はじ)けた。

はッとした、
わたしは。

はるか向うで
わたしの聲。

秋の瞳

秋の瞳にうつるは
透きとほる晝の月、

ああ、遠い國の岸に
芒(すき)のやうになびいてゐる
わたしの生命(いのち)。

影

月の夜の
わが現身(うつそみ)は、
遠(をち)かたの沙漠のうへを
縹緲と青うかすむる影。

唄

霧におぼれて
さまよへば、

落葉は幽か
身もかすか、

涙にしめる
わが唄も、

おぼれおぼれて
はるかなり。

古風の窓

野茨の道

夕闇に花しろじろし野茨の細道、にほひの道、われやひとり行きつもどりつ、行きつもどりつ、貧しくはあれ何となき幸をおもふ、明日は弟も來るといふ。弟が來なば、明日も晴れなば、この細道

に伴はめ、五年ぶりに手とりてやらめ、弟も、よき若者となりたらむ、何がしあはれも知りたらむ、そは兎まれ野茨の道は、まして丘への細道は、兄と弟がすれすれて行くにふさはし、ほつほつと語るによろし。

野あそび

たまさかの野あそび
つれだちて野には來たれど、
なれど、病む妻の笑ふとはせず、さはれ日の陰る
ともせず、辛夷の花の今さかりにて、徒らに風う
ららにて、妻あはれなれ。しかはあれ、妻は立ち

寄り指しにけり、ほれぼれと仰ぎ見にけり、片丘
かげの辛夷の花を、影うけてかうがうしくも寂び
たる花を。ああ、言はね笑はねうれしき妻ぞ、わ
が妻は。笑はね言はねうれしき遊びぞ、この野あ
そびは。

日の暮れ

妻病みて、醫者をよぶとて、日の暮れの巷路ゆけば、こがらしに吹かれてゆけば、みちばたの小暗きに、ほのじろき水鉢に、水仙の芽のさむざむあ

かりぬ、わが胸もややにふるへぬ、ふるへつつ、見やりつつ、巷路をとぼとぼゆけり、こがらしに吹かれてゆけり。

山道

日の暮れの雨に濡れつつ、卯の花を裾にちらしつ、山道をひとりし行けば、泥濘に難みつ行けば、波の音いよよ高まり、あらし雲いや低う垂れ、樹も草も揺れて繁吹けり、天地も晦くなりけり、かか

る時われやおもひぬ、小鳥にはよき塒あり、遠方にわが家もあり、吾を待ちて灯ゆらぐと、旅なれば、雨の夜なれば、すずろに里のこひしき。

旅

日はあかり、
また陰りけり。
山あひの麥の青さの
しみじみと胸にしみけり、
ひとり峠の路をゆきけり。

蹄のあと

武藏野のわかれ路ゆる、
馬蹄のあとも右し左し、
眼にしみて白う見らるる、
枯桑の影のほとりに。

春來れば

春來れば、
鳴立澤の磯寺の
潮のかをりのそぞろしのばゆ。
磯べには、筆草とやらも生えつらめ、

知る人はその草折りて、西行ならね、
世の儚なごと砂のうへにも書くならめ。
春來れば、鳴立澤の磯寺の
その磯砂もそぞろしのばゆ。

天の川

天の川しらむ夜ごろは
蘆の葉の露もしとどに
我妹子は薄衣かこちぬ、
なか空ゆ聲の見ゆるは
はや秋の鳥わたるらし。

藤花追憶

赤き屋根

野茨の道をすぎゆかば
師の家ありとわれ思ふ。

野茨の道をすぎゆきて
裏山づたひ、藪ぬけて

—小田原谷津にて—

けやき林のかなたなる
赤き甍の見ゆる邊に
われや幾たび忍びけむ、
訪はで幾たび歸りけむ、
いつも日ぐれの歸路に
著莪は寂しき花なりき。

野茨の道をすぎゆかば
師の家ありとわれ思ふ。

卽興二篇

——白秋山房に泊りて——

一、水仙

この庵をゆるされて
ひろびろと寢るうれしさよ、
わが生きの日の終りまで
匂へよ、このゆめ
枕邊の水仙。

二、あかつき

あかつき、醒めて、
この庵の外の
竹の根方に尿する、
尿のすずしさ、身のありがたさ、
ああ、鶯はまだも啼かずや。

憂欝

——本郷根津蜂窩房にて——

雪のやうに沈默を重ねて、
暮れがたの李のやうに
おもひはさびれる。
——みつめる壁の冷たさ、うすあをさ。

それでも壁のかなたの
夜空には、
うつくしい星が耀き、
遠い海が鳴つてゐる、昨日のやうに。

ああ、南方の記憶よ、
青空と光と花にいろどられた記憶よ、
せめてはあたためてくれ、
この霙のやうに寒いおもひを。

藤花追憶

―中野にて―

師をおもへば、
わたしの記憶のたそがれに
ありありと藤の花が咲きます。

道了の山の降りは
師もお疲れだつた、わたしも疲れた、
里の近くで日が暮れかけた、古ぼけた茶店が見えた、
藤棚に藤が咲いてゐた、薄ら明りに波うつてゐた、
「くたびれて宿かるころや藤の花。」
見て過ぎながら師が言はれた、
「芭蕉はいいな。」と、静かに言はれた、
わたしは涙がこぼれさうだつた、
「たぶん白かつたろな、その藤は。」
また師が言はれた、ああ、幽かに言はれた。

まことに、まことに師をおもへば、
その日の藤が浮びます。

丘の道をゆきて

「松蟲草を、きみ知るや。」
「否。」と應へて、うれしかりけり、
うれしかりけり、かりそめ言も、
久にして宣したまへば。

貧者の葡萄

哀傷篇

わが夜はながく
あまりにも暗ければ、
せめて、あけぼのは
濱べにゆかむ。
ひとなき濱にみつる

潮かぜに
このためいきをおひやらむ。
波のしぶきに
身をふれて
よみがへる氣をすはむ。
海の底より
鳴りいづる
あかつきの鐘をきかむ。

ああ、なみだをさめて、
水平にあらはるる
第一の帆をまたむ。

げに、あけぼのは
濱べに行かむ。

櫻あかり

わが涙
いたづらに風に吹かせて、
ああ、れうらんたる
さくらあかりよ。

地のこゑ

あをぞらに
微笑の影はあれども、
ほろびゆくもののこゑは
地にみつる。

樹の枝に
ひぐらしの

たえ〳〵なる、
すがれたる朝顔の葉かげに
こほろぎの
ほそ〳〵なる。

あをぞらをのぞみて
歌はうたへど、
わがこゑも
ひかりのなかに
かなし、微けし。

貧者の葡萄

――ふるさとの貧しきはらからに寄する――

ちちのみの父
ははそばの母、饑ゑに泣くとも
いかがせん、われも貧しく。

われらはらから、
聲をかぎりに泣きいざつとも

地のうへに、みな死ぬるとも
こともなし、大空は
かばかり青くはれわたりたり。

泣くなかれ、
あはれ、はらから、
この朝のすがしきに
貧しき兄が朝餉の卓にすはらずや、
この美しき葡萄の房に見入らずや。

こはこれ、この秋に兄が得し
ただ一つの收穫にして、
つぶら實のひとつびとつに
わが秋の歌をこめ、
わが虔ましき悲願を封じたり。

げに、われは
錬金の狂者のごとく
夢想のなかに耕したり、
これらの幾房を得んことに

げにも、うき身をやつしたり。

されば、弟よ、
このむらさきの明るく透ける果を吸へよ、
ああ、いかに豊かなる韻律の流れいづることぞ！
また、妹よ、
そのみどりなる二つぶは、
ながが耳につるして踊れ！
耳環のごとく搖れ、搖れて、
つぶらなる實は、

青空に鳴れて鳴らん。

ああ、弟、妹よ、
これをしも愚かとおもふや、
われらなほ饑ゆるといふや。

獨樹

時雨が通つた、
いつか月の夜となつた、
旅人が過ぎた、
鳥の影が掠めて行つた、
殘された一樹は光つてゐた、
拜みたいほど光つてゐた、
武藏境の野道であつた。

光の聖處女へ

蒼空の玉座なる
光の聖處女さま、
あなたのお顔はあまりにも眩しうて、
このあはれな心の盲者には拜めませねば、
せめてあの、琥珀いろに透いて見える
奇蹟の薔薇をちらしてくだされ、
ゆたかな光の花粉を降らしてくだされ。

光の聖處女さま、
その金いろの花粉を、
——虚無の網膜にみたしてくだされ、
——時のきざみにふりまいてくだされ、そして「死」
にいそぐ歩みを柔げてくだされ、
——風の道にも撒きちらして、さすらひ人のあし
もとを飾つてくだされ、
——水のうへにもふりこぼして、抒情のながれを
薫らせてくだされ。

光の聖處女さま。
その金いろの花粉を、
——地のうへにも降らしてくだされ、
——もろもろの影になやむものに、踏みにぢられて凋れた草にめぐんでくだされ、
——翼のやぶれた小鳥、色の褪せた花を光にそめてくだされ、
——最後には、このあはれな心の盲者の胸にもふり撒いてくだされ、

紫がかつた柘榴の實のやうな、この魂の傷ぐちを金色に塗りつぶしてくださりませ。

蒼空の玉座なる
光の聖處女さま。

昔日の歌

風と葦切

いづこより生れ來て
いづこへ行くか、
風ひとり汀を過ぐる。

風ひとり汀を過ぐれば、
葦原の葦の葉そよぎ、

籠り啼く葦切の聲も吹かれて……
……風鳴琴のなるごとく
ひろごり、ほそり、
絶え、つづく。

その果てしなきルフランは、
ふるさとの
遙かなる日のねむり唄。

ああ、風遠く
いづこへ行くか、
忘れ得ぬ唄をおくりて。……

蕨草

ひかりのなかのわかくさは
ごむのをぐつのふみごこち。
ひかりのなかのわかくさは
かうぞのむちのはねごこち。

滅びし戀の記憶

午睡の夢の徑をさまよひ
眞晝、木槿の林に入りて、
われは見たり、
何人かすてさりし搖籃を。
眠れるは

こひ人に似し嬰兒の顏——われの顏、
息絶えて、なほ消えぬ微笑に、
睫毛のうへに、
紅の花、徒らにゆれゐたり……

目醒めては
もくげ林のありかもわかず、
蟬の聲あかるく繁く、幻を逐ひ、
たゞのこる蒼空の月、
ほのかにも忘れし人をおもふ。

寂しき花嫁におくる

鳴りいづる午の鐘、
風すずろかに、ゆるる薔薇。
六月の野に聲なき讃歌おこり、
まぼろしの女神われらが徑を過がひぬ。

透ける裳は花に埋もれ、かつ消えて、
後には聖き薫りのみなる。
寂しき花嫁よ、今ぞ華燭の宴をはらむ、
賓人はなけれど、薔薇は空にも咲きあふれたり。

われら夢みる者は水にさへ醉はむ、
踊らざれど、華やげる饗宴の心とならむ、
歌はざれど、よき言葉、花粉の如く散らばはむ、
沈默なす光のなかに。

ああ、今ぞわれら永遠につらならむ、
薔薇は空にも咲きあふれたり。

影

月病める
地の涯の旅をゆき、
風さむき野には立てど、
われはもつ、わが影を。

蒼空の薔薇

蒼空に咲く光の薔薇よ、
指させど、おんみは遠し、
病める目に、おんみはまぶし、

さもあらばあれ、
おんみの花粉は地にあまねく、
よき薫り貧しき心を染めたれば、
われらたゞ祈ることを知る。
蒼空に咲く光の薔薇よ。

海音

巨人あり、
おごそかに、ほら貝を吹く。
一日われ、海邊にたちて
そを聽けり。
そはひろごりて、渚に、岸に、

雲の際まで反響する
大古の音いろ、
あやしき海の唄なりき。
——唄は語りき、きれぎれに
生を死を、
昔を今を、
なべての國の
言葉なき言葉もて。

をりからの落日に
水平のかた、ノアの方船あらはれ隠れ、
コロンバスの帆船かがやき消えぬ、
現身は涙にぬれて幻のごとく。……

友よ、
この不思議なる法螺貝を聽かんとするか、
そが祕めたる唄ごゑを、
青き、はた薔薇いろの息吹きをば。

さらば行け、海のほとりに、
心むなしく眼をねむり、
かくてまた耳を澄ませよ、
巨人あり、おごそかに、ほら貝を吹く。

昔と今

わたしに
清教徒の日があつた。——

神は
橄欖の
祈りをくれた。

女は
白薔薇の
ちかひをくれた。

歌は
夕月の
おもひをくれた。

ああ、人性のたそがれに佇んで、
おもふ、かかる日の幸を。

わたしに
異教徒の日もあつた。—

惡魔は
毒草の
のろひをくれた。

女は
阿片の

肉樂をくれた。

歌は
煉獄の
まぼろしをくれた。

ああ、人性のたそがれに佇んで。
またおもふ、かかる日の幸を。

夜の虹

今をかぎりに
そのつぶらなる眼みはりて、
こひ人よ、見よ、
眞近かの夜ぞらに
あやしくも美しき虹は懸れり。
この虹を見るものは

盲ひて死すと傳へられ、
人みな怖れて深々と帷をひき、
この夜ごろ安らかの眠りにつけり。
さるを戀人、汝と吾とのみ、
目覺めて悲しくこの虹を見る、
邪淫の臥床に身を伸して、
この七色の妖光を見る。
ああ、白日は、今、落葉とともに

雪の地平に埋れて歸らず、
あけぼのに晒らすは
盲ひて爛れし
われらが二つの屍のみ……

さあれ、戰のくをやめよ、こひ人、
この虹のうつろはぬ間に
ながめつくさむ、
歡樂は短く、
滅びの闇よしや睫毛に迫るとも。

ああ、今をかぎりに
そのつぶらなる眼みはりて、
こひ人よ、見よ、
眞近かなる夜空の
あやしくも美しき虹。

深夜の舞踏

深夜の闇に
青白き炎ともえて、
雪は舞踏す。
静寂の底なるわれらが棲家、
――ましろなる墓のうへにも、

金雀枝の花をふり撒き
裸形なる汝は舞踏す。

流れよる霧の吐息、
黒髪の蛇とからみつ、
白百合の花みだれ轉けば、
素足の下より
滾々と湧きあがる泉の音、
噎えてゆく朱欒の匂ひ……
水は流れながれて

蓐をひたし、
汝が裸身も、いま、
溺れゆくなり。
ああ、喘ぎのせつなさよ、
あぢさゐの如く蒼ざめてゆく額よ。

深夜の闇に
青白き炎ともえて、
雪は舞踏す。

闖入者

悦樂に
われら現ともなく
曉のしづけさを冒すとき、
ふともして我は見たり、
この室にしのび寄る

青き眼の女人を、
われらが臥床に、
月魄と雪のかけら
音なう投ぐる白き手を、
黒き紗衣に
息せぬ胸の透けるを、
眼のみ燃えて光るを。

ああ、さるを、戀人は知らず、
戰ける わが腕にすがり、
こころよく曉を眠らんといふ。

夜の唄

月青む
枇杷の葉がくれ、
遠き音に
海は鳴る。

——枇杷の葉隠れ、
白金の蜘蛛の巣に
圓ら實、重く
かかる下。

蒼い衣物の船大工
おもは伏せ、歎息しつつ
夜もすがら
水板をけづる。

……眞白く剝がるる
樹の皮は、光りに濡れて
死魚の、鱗のごとく
涯しなし。……

月青む
枇杷の葉がくれ、
圓ら實、重く
かかる下。

失戀祕章

——或る物語の序詩——

わが清教徒の日に
こひし處女、
金柑の林にわかれを歎き、

未來をちかひ、
銀の十字架と白き薔薇
かたみに、去りぬ。

ちかひの言葉
秋の日の香爐のごとく
すがしくも淨ければ、
そのかをりうつろはぬ間に
そを銀の十字架に添へ、
金柑の林に埋めぬ。

幾日ならず
白き薔薇は枯れ、
月はるかなる呼笛を吹けど、
去りし人はかへらず、
現身は、風獻欷る蘆原の唄にこもり、
こころは空しくもとめて、
黄昏の街をゆきかよひき。

かくて、幾月

海のかなたの遠國に、
こひ人は現世の春の貢ぎを享け、
白き墓標に
眞珠の首飾もて縛されぬ。

その日より
わが棲める黄昏の蘆原に
夜明けなき夜はきたりたり、
草樹を折りて、暴風はすさび、
花を傷りて、雨は過ぎ、

獸ら、喊聲をあげてさまよひき。

――されば、わがこころ盲ひたる乞食となりて、
冬雨の巷に飢ゑ、
また色狂の犬となりて
毒草園の實を漁り、
或はまた、流人となりて
遠國の海に漕ぎ出でぬ。――

かくて、一日、憂鬱の牢獄を出でて

不淨の身を雪にそそぎつ
わが清教徒の日をおもひぬ。
祈りの涙、繁ければ、
かの白薔薇の處女をもとめて
金柑の林にゆきぬ。

……枯れ果てし林の奥、
雪を掘り、朽葉をわけて、
われは見出でぬ、かの日の處女を。
歎きのなかに、われは見出でぬ、

――その銀の十字架は鏽び、
今はたゞ一本の朽ちたる釘のごときを。

跋

土曜日のない者の感想

一

明日も明後日も、いやこの先き幾百幾千日の「時」が完全に私自身のものだといふ歡びは、時間勤めの束縛から解放された瞬間の人でなくてはとうてい想像も及ばぬであらう。

大正十年の夏、わたしが銀行員・雜誌記者と續いた足掛九年間の勤めを自ら辭して東京から小田原に移り住んだ時、この歡びは文字通り

私の歡びだつた。もはや私を壓迫する何者も無かつた。頭上は直ぐに青空だつた。さうして私の周りには集團生活の釀す惡臭の代りに野茨の花の芳香が漂ふてゐた。小競合の代りに野鳩の和ぎが澄んでゐた。罵りの代りに蜜蜂の歌が聽かれた。憎しみの代りに大海の慈しみが湛えてあつた。煙や煤や埃の代りに微風と光と新鮮な空氣が滿ち滿ちてゐた。最早やあの金網の檻は山と海と丘と野との彼方に永久に埋沒してしまつた。私が立つてゐるのは最早やあの灰色の獄室の中ではなくて、爽やかな綠の風景の中――麥畑や桐畑や蜜柑山や竹籔や雜木林の中だつた。

ああ、山霧の息吹き、野鳥の囀り、――生氣と自由。梅の古木に圍まれた住居、果樹の多い外園、――靜穩と慰安。暢らかになつた私の夢は今

こそ雲に乘つて翔けめぐつた。

その時代の私にとつて、この自由は全く何物にも代へ難いものであつた。私は、仰いで空の青さ廣さに驚いた。觀て草木花鳥の潑溂さ新鮮さに驚いた。いや、自然の斯くあることを全感覺全靈魂を擧げてその時はじめて發見した、と云つても誰がこれを誇張の言と咎め得るものぞ。それほど私は自然に飢ゑてゐたのだ。而も亦それほど自然への鄕愁と思慕と憧憬とを壓へて來たのだ。それほど九年間のあの蟄伏と默從と束縛の生活は堪へ難かつたのだ。ドストエフスキイは多端な人事の葛籐に驅られ生活苦に追はれて、一生涯、自然をふりかへる暇がなかつた(爲めにその數々の大作の中にも自然描寫は極めて稀れであると言はれてゐる。然もあの「貧しき人々」の中に出て來る若干の

自然描寫のみづみづしさはどうであるか。彼にその暇を與へたなら、或は偉大な自然詩人の名に於いて呼ばれなかつたとも限らぬのである)。この事實は私をして親しく微笑せしめる。而も私は遂に自らを自然の中に放つたのだ。それも小田原の自然の中にである。實際、小田原の自然くらゐ饒かにも惠まれた自然は少ない。そのありとあらゆる風物は、既に私の詩作生活にとつては無限の寶庫であつた。また今でもさうである。私の驚きと歡びと感謝とが一入深かつたのも無理ではあるまい。

兎もあれ、私はあの束縛と威喝の牢獄の中に九年間も求め佗びた生活を、さうした自然の中に實現したのである。職を自ら離れた私は、この冒險のゆゑに飢ゑるかも知れぬ。飢ゑてもよい。藝術生活をより純

粹に深めようとする私にとつては、貧から解放されることよりもまづ時と束縛から解放されて自由になることこそ必須であつた。――パンと自由と二つながら同時に得られないならば。さうだ。飢ゑるともこの生活を棄ててはならぬ。これからこそ、ほんたうに冥想し、ほんたうに詩作するのだ。いやそれよりも先づ、第一に野生の菜つ葉や葡萄や蜜柑や生瓜と一緒に、この田園の素朴な雰圍氣と健康な光と影と新鮮な空氣を飽くまで貪り食べるのだ。飢ゑるかも知れぬとは笑止な事である。この食つても食つても尙食ひ盡せない自然の滋養が、どうして私を飢ゑさせる筈があらう。私は爽冷な山氣に打たれるのだ。海風に吹かれるのだ。近い太陽に曝らされるのだ。花粉に塗みれるのだ。さうして身についてゐる一切の病的な滓や埃や雜臭を洗ひ落す

のだ。それから自然の祕密に探り入るのだ。鳥の言葉を、草樹の呼吸を、花の智慧を、昆蟲の囁きを解き明かしてゆくのだ。私の詩作生活はかくして初めて伴はるべきである。……

私はかうして虔ましく、何者にも捉はれず何者にも亂されず、田園に落ち着くことを得た。何といふ自由な感謝に滿ちたその日その日が續いたことであらう。しかしその間にも、私はよく嘗ての束縛の日の夢を見た。――束縛から放たれた嬉しさ紛れに、これは眞實か、眞實かと疑つてゐる自分。それも束の間でまた威喝の鞭に逐ひやられつつ、もう一生涯この苦役から遁れることは出來ないのだと絶望してゐる自分。目が醒めて、それが夢だとわかつた時、さうして早くも耳に慣れた相模灘の濤聲を聞く時のうれしさ。雨戸を繰り開けて、向ひの竹林のうへ

に展けた青い山脈を見る時のありがたさ。自由、自由、明日も明後日もいや無限に「時」は私自身のものだ、と私は今更のやうに繰り返して思ふ。この思ひは、實にあの無限の空の雲にまで連るやうな氣がした。

然り、その當時の私にとつては、思索に、詩作に、讀書に、散歩に、朝寢に、旅行に、縱しまたたづきの爲めの仕事にまれ、「時」を自分の意の儘にふんだんに費し得るといふことくらゐ大きな滿足はなかつたのである。

二

時が經つた。私は或るさびしい事情から、とは言へ、所期の自由を得健康を得、剩へ意外な機緣から詩作生活の上に耀やかしい光明を惠ま

れつつ、約一ヶ年半の小田原住ひを引き揚げて東京へ歸つて來た。が相變らず私は絶對に自分の時間の所有者であつた。この點にかけては、全く自由そのもの幸福そのものと云つてもよかつた。時間といふものに就ての絶對の自由は、私をしていつか時間の觀念をすつかり忘れしめるほどになつてゐたのである。しかし、その代りまた私はいつか自分に土曜日の幸福といふもののないことを意識するやうになつたのである。

土曜日！明日が日曜といふ晩、期待に滿ちた晩！その晩のたのしさは恐らく誰もが小學時代に最も新鮮に最も深く味つた氣持ちであらう。それは寧ろ日曜日の實現された樂しみそのものよりも更に樂しい。希望こそは常に最上の樂土である。寢床に就いても眠られぬ程

のいそいそしい氣持で思ひ描く明日の遠足、山のぼり、或は野あそび、とんぼ釣り。純な甘美な空想、夢。――それの延長は勤めと時間に束縛される大人にのみ見出される。ただ、より現實的、或はより實際的になるだけのことである。土曜日の夜。時間に制限のない宴樂はこの夜にのみ限られるであらう。オペラ、シネマ、音樂會ゆき、さうした樂しみは、日曜よりも寧ろこの夜に多く充たされるであらう。明日の朝寢、骨休めさては婿曳、小旅行、さうした期待もこの夜にこそ最も豐かであらう。土曜日、樂しい土曜日。

さうだ、私にはもう、かうした土曜日が無いのである。土曜日の無いことは、元より日曜日のないことの謂ひである。「時」に束縛される人にこそ日曜日の解放はある。「時」の自由人たる今の私に日曜日の解放の

あらゝ筈はない。明日も明後日も永久に休みである私には、一生涯は永久の日曜日に似て而も永久に日曜日はない。日曜日であるためには、他の六曜が必要とされねばならぬ。隨つて永久に日曜日のないゆゑに、私の一生涯は休みに似て而も永久に休みはない。それは何時までも「束縛されぬ苦役」の連續である。日曜日のない私は、かくて土曜日のない私なのである。

恐らくかうした自由の生活の續く限り、一生涯にもう二度と土曜日のたのしみは味はひ得ないであらう。と言つてまた土曜日を取り返すために、この自由な生活を棄てやうなどとは私の思ひも初めぬことである。それは既に私の生活から永久に滅びたのである。が、取り逃がした鳥は美しい。釣り落した魚は大きい。滅びたものほど哀惜さ

れる。

殊にこの二三年來、自由に慣れ自由に癈痺した私は、時間の自由などといふものの有難味はとうに忘れて了つてゐる。生活は漸く自由を通り越して放縱の域に進んでゐる。今の私の生活は「時」を極度に冒瀆し濫用し無視してゐる。晝が夜になり、夜が晝になる。昨日とも今日ともつかぬ、仕事とも休みともけじめのつかぬ然うした不規律な生活、永久に土曜日のない生活の連續は、强ち明るい氣持でのみは省みられない。兎もすれば滅びた土曜日の樂しさが限りなく追想されるのである。

かうした心持を最初のあの解放の歡びに比べると、何といふ變り方であらう。しかもこれは必然なる心的推移である。また何とすること

も出來ぬ事實である。人は得た瞬間から、再び失ひ始めるのだ。渴きを醫さうと跪く間のみ、水は渴ける者にとつての一切である。けれども存分に渴きを充たした瞬間から、次第に水は何物でも無くなるであらう。そして今度は水以上の、或は水以外の何物かを求め出すであらう。私はかつて時の自由を跪き望んだ、得た、かくて漸く自由の中に自由を失ひつつある。今や時の自由以上の、或は時の自由以外の何物かを求めつつある。

三

以上が近年私の生活に起つた變化であり、推移である。少くともそ

の主なる一つであるが、かうした變化と推移の跡を自ら省みる時、これは亦、私が私の詩を考察する上にいろいろの暗示を與へてくれるやうに思ふ。即ち、前述の如き私の生活の變化と、それに先き立つ、若しくはそれに伴ふ心的過程とは必然の事であると同時に、それはまた善くも惡しくも悉く私の詩の動因となつてゐるといふことである。假りにその心的過程の相を三つに分け、束縛時代の忍苦と自由の渴望を第一の相とし、自由解放の實現に依る愉悅と安住と觀照とを第二の相とし自由の飽滿と倦怠感と過去の束縛時代の追憶とを第三の相とするなら、私の詩のうちの、明日を待ち望む憂鬱な祈求と哀訴の詩は第一の相から生れたであらう。今日に住する孤獨三昧と靜觀の詩は第二の相から生れたであらう。昨日を振り返る取り止めもない情痴と追慕とまた

空しい夢と鄙愁の詩は恐らく第三の相から生れたであらう。またこれらの諸相の連りは、詩の傾向から云つて、ロマンチシズム、シムボリズム、リアリズム、ネオ・クラシズムの波動に似通ふものがないであらうか。更にまた詩形の上から云つて、如上の心的推移は、私が舊詩型の束縛から脱しようと蹠いて自由詩型を求め、新しい手法を見出さうと努めながら、尚且つ定型詩とその古い手法にそくばくの哀惜を感じてゐる形に似通ふものではなからうか。それは兎もあれ、私の生活の方向は、つねに私の詩の方向であり動因である。そして私の生活は、私の欲望に限りがない以上、今後と雖も恐らくこの著しい三つの相を幾度か循環させることであらう。それに伴れて私の詩も恐らく斯様な著しい三つの相を幾度か循環させることであらう。

少くとも、このやうなのが今までの私の詩の姿であつた。善いにせよ悪いにせよ、私の詩の事實であつた。即ち内生活のいづれの相いづれの傾向も、それが私にとつて止むなき必然である以上、私はこれを恐れたり避けたり抹殺したりはしなかつた。――少くとも意識的には。祈りでも啜り泣きでも溜息でも、歡びでも微笑でも安住でも、頽廢でも感傷でも思慕でも何でもよかつた。それが如何なる情痴の屑であつても、亦如何なる苦痛の滓であつても、苟しくも詩心を動かすものは凡てこれを素直に受け入れたのである。善かれ悪しかれ私の止むなき内生活の眞實として、また私の詩の動因素として、如上の心的諸相を肯定したのである。ただ私がひたすらに恐れたのは、如上の諸相の間に偶々介在する空白の相のそれであつた。これは石であり、枯野であり、

谺のない谷である。そこからは斷じて詩は生れない。いや散文以下のものさへ生れない。故に私の内生活にかうした空白の頁のより少なからんことを、私は詩の爲めに願つたのである。

さて、繰り返して云ふ。斯様に明日への渇仰と今日の靜觀と昨日への追慕とが循環し連關し錯綜し、時に分裂し時に融合するのが、今日までの私の詩であつた。人は畢竟、昨日と今日と明日を引き離すことは出來ない。今日は昨日の連續であり、明日は今日の延長である。昨日の影は今日に投ぜられ、今日の光は明日に反射される。この有機的關係こそ人間心象の記錄としての詩に、最も微妙なまた最も意義ある暈翳を與へるものでなければならぬ。昨日は昨日として葬り、今日は今日として生き、明日は明日として望む、截斷的に斯く壯語することはた

やすい。元より私とても斯様に生きんことを望んでゐる。然しながら思索の世界に於て、特に詩の世界に於て、かうした避け難い必然の相關々係の微妙さを等閑視する者は呪はれてあれ。少くとも私は内生活にこの微妙な相關々係の愈々深まらんことを希ふ。斯く云ふは私の詩にその微妙な暈翳（ニューアンス）の益々深からんことを望むといふに同じいのである。ただ私はこの笛の歌口に、憂愁の音色をあまりに注ぎ過ぎたかとも思ふが、これとても私の幼年・少年・青年期を通じてその時その時に受けて來た悲痛事の一切が、黄昏の薄明から曙の光に泳ぎ出さうとする今の私に餘りにも色濃く投げかけるところの影に他ならない。

然り、私は私の今日の詩に昨日の憂愁の影の濃いのを認める。けれども次第に、第に、私はさうした過去の蒼白い幽靈を逐ふて、より孤獨

なしかしより朗らかな人間普遍の悲哀の中に、その光の中に(さうだ、それは影といふよりも光だ)昨日のきれぎれの悲哀の影を溶かし込まうとしてゐる。さうして究竟は明日の蒼空と光を指さうとしてゐる。

それが、この詩集を出發點とする私の詩の方向である。

如上の意味で、この集に收めた數々の詩は今日のこの出發をおのづから豫感した私の準備である。今日を胚んでゐた昨日の心象斷片の、その單なる素描と見られて聊かの異存はない。

大正十三年十二月十三日土曜

深更から曉にかけて

大木篤夫

卷末覺書

私がはじめて韻文らしいものを書いたのは、嚴密に言へば、九つの頃だつた。確か宮島へ遠足した日曜日の印象を七五調で十四五聯書いたと思ふ。どんな風なものだつたか、今はもう記憶にない。元より幼稚極まるもので、かりそめにも詩といふやうなものではなかつたらう。しかし私が韻律や格調の持つ魅力を無意識的ながらにも感じ始めたのはこの頃からであつた。

さうした詩の芽生は更に十五六のころ短歌といふ形式の中で幾らかの光に浴したが、その後いくばくもなく『靈園』によつて、續いて又『思ひ出』によつて、私は詩的表現に全く新らしい世界のあることを發見した。とりわけ

『思ひ出』が私の小さな魂に展開してくれた世界は實に驚異と不可思議と恍惚そのものであつた。稍詩らしいものが私に書けるやうになつたのは、何と云つてもそれからのことである。この意味で、私の詩は既にその當時から『思ひ出』の著者に最も多くのものを負ふてゐる。謂はゞその當時から私は秘かに『思ひ出』の著者を師として崇拜してゐたのである。遠い昔のことであるが、今にして思へば實に因緣淺からざるものがある。

爾後九年間、私は散文に走り俳句に行きまた短歌に歸りしたが、畢竟、純粹の詩に對する愛着は何れにも勝り、詩作の衝動こそは常に最も本質的なものであつた。さうして間歇的にではあるが、私の詩作は永く續いた。しかしそれも要するに暗中摸索の頻ひに過ぎなかつた。私は自己の本質を正しく發見し、正しく把握し、正しく表現することが出來ないで焦れに焦れた。いろいろに迷つた。

が、その後更に三年を經て、即ち大正十一年の四月、初めて小田原の山房に北原白秋先生の門を敲くに及んで、私の詩眼は刮然として開けた。私はその日のことを忘れない。それは實に私の詩作生活の上に明確な新紀元を劃する第一日だつた。かうして覺書きをしてゐる今も、その感激の日の一切の出來事は新鮮にも昨日の如く髣髴して來る。まつたく私はその日さながらの感銘を再びするの思ひがある。しかしそれに就て多くを語ることは、この記述の目的ではない。他日、思ひ出の記を物するときに讓つて特筆大書させて貰ひたいと思ふのであるが、兎に角その日ほど賞讃され認識され好遇されたことは嘗てなかつた、と同時にその日ほどまた畏れを感じ自重を知り詩道の容易ならぬことを自覺したこともなかつた。私は眞に偉大なる者を初めて咫尺の間に仰いだのである。さうしてこの偉大なる者の言葉から身香からまづ私の感受したものは、無限の愛、光明、力、歡び、豐富な詩情のそれであつた

が、而もその溫容和聲は絶對の權威を以て私に臨んだのである。茲に於て私は秘かに欽慕してゐた『思ひ出』の著者を明らかに、また即座に師と仰ぐに至つた。然り、私はその後絶對の信頼を以て師が詩の道を道とした何等の逡巡、何等の遲疑なく初一歩から踏み直した。勇敢に從來の自分の詩の多くを抹殺した。畏るべきを畏れ尊ぶべきを尊び習ふべきを習ふことは屈辱ではない。私は謙虚であらうとすると共にまた一つの信念に生きた。然し高い詩境を目のあたりに窺ふ事は、私には只々畏れであつた。私は考へ深くもなつたが、また堅くもなつた。詩の本道が多少でも解つて來れば來るほど難しかつた。また心境は開け詩境は高まつても、適切な表現は容易に之に伴はなかつた。かうして苦しむこと半歳餘、しかも詩らしいものは殆ど成らなかつた。

大正十一年の末頃、私は小田原を引きあげて東京に歸つた。そして本郷根津の或るアパートメントに佗しい假り住ひをした。然るに、それから數日後

小田原に對する思慕と寂寥の中から、「風・光・木の葉」他三十餘篇の詩が一時に出來たのである。これがどうやら表現の排け口となつて、その後八ヶ月間に更に百五十餘篇を得た。大體かうした經路から成つたのがこの詩集である。

で、この詩集には長短併せて百四十四篇の詩を收めたが、その多くは前述の通り大正十一年の十二月より翌年の八月まで約九ヶ月間の收穫の中から選んだものである。たゞ、これに大正十一年前半期の十五六篇、更に五六年を朔つて『昔日の歌』十三篇及二三の舊作、新しくは十二年九月以後本年六月までの八九篇をも加へたが、何と云つても、それ以外の百數篇の詩がこの詩集の中心を爲すもので、作者としても、あの九ヶ月の詩作の期間を最も意味深く思ふ。元より斯樣な經路から成つた詩であるから勢ひ素描風なものの多いことは免れ難い。たゞ私が自ら多少の希望を繼ぎ得るのは、これらの素描

を克明に續けてゐる間におのづから修得した何物かを、今後この素描の上によりよく生かして行くところにある。何は兎もあれ、この詩集を私の詩の發足點と見て貰へばよい。

詩の排列は必ずしも詩作の年代順には據らなかつたが、詩集全體の統一均齊を保つためには、寧ろ作の新舊に拘はらず、情調氣分の流通したものを類別し、之を同一の章に收めて各章それ自體の綜合的氣分を生ぜしめ、或は同時に成つたものを一纒めにしてその連作的氣分の機微を傷はしめないといふ程の用意は多少とも爲たつもりである。また章の順序は、私の心象の明暗がおのづからその波動を示したいふまでのことで、格別の理由はない。

集中の詩篇は主として『詩と音樂』をはじめ『太陽』『日光』その他の雜誌に發表したものの中から選び、これに未發表のものを多少加へた。すつと以前、匿名で雜誌に書いたものも一二ある。この集に收めるに際して、再三改

删を施した詩も少なくない。

次に各章に亘つて簡單な覺書を添へて置きたい。

蜻蛉篇

「小曲」は舊作、たしか大正六年頃代々木での作と記憶するが、少し誇張的に言ふことを許されるなら、私はこの眇たる一篇によつて北原白秋先生に認められたと云つてよいであらう。作後六年間むなしく埋沒してゐたこの詩は大正十一年九月『詩と音樂』創刊號に推薦の榮を得た。ほんたうの意味で私の詩が世に發表されたのはこれが初めてである。私は一生涯この詩を記念とすべきである。「風・光・木の葉」は前述の通り大正十一年十二月本郷根津の或るアパートメントでの作、新年號の『詩と音樂』誌上に載せて貰つた。既に述べたやうな譯で、これは私の新作の基調をなした最初の一

篇として、また忘れ難いものである。斷つて置くが、この詩は序詩として後から書いたものではない。最初『詩と音樂』へ發表した時には「心虛しく」といふ題だつたのを後に今の題に改めた。そして偶々詩集の表題をこれに採つた爲めに、期せずして自ら序詩の如き態をなしたのである。が、序詩と見て貰つても差支はない。「一すじの草」は無論「一すぢの草」が假名づかひとして正しいのであるが、この場合は特にこの誤用を敢てした。一本の纖細な草の感じを字面にさへも出したかつたからである。

明日の花

このうち「茨の芽」「青木」「明日の花」「雪折れの竹」等は大正十二年三月の作、『詩と音樂』所載の早春小景の中から選んだ。何れも小田原の風物を歌つたもので、「明日の花」は山田耕作氏によつて作曲された。「明かる雲」

も同時の作。「雪後」「桐の枯木」「旅がへり」「岸の根」「小魚」「こぶしの花」「街道」等は十二年四月の作、『詩と音樂』五月號所載。「親しき花」は五月の作、『詩と音樂』六月號所載。

見慣れた風景

多くは十二年二月の作、『詩と音樂』三月號に載つた。「八つ手の花」は同時の作。「むかし」「べんべん草」は四月の作で『詩と音樂』五月號に發表。「曇り日」は後の作、反對に「うぐひす」「珊瑚樹」は十一年四月の作。いづれも小田原時代の生活氣分が基調となつてゐる。私達はあの頃よく歎息した。が、いつも明日の花を待つ虔ましい氣持で暮らした。但し「朝餉」一篇は七八年前、代々木で妹と二人暮らした頃の作で、友人に頼まれて或る同人雜誌に匿名で寄せた。あの頃の生活が懷しく、どうも棄て兼ねて、この章

に加へることにした。

杉菜の頃

「溝のあちら」「水馬」「野の羊」「ひなた」は十二年五月の作で『詩と音樂』六月號に載つた。「目醒め」「遠い母に」は七月の作で、新居の消息に代へて故郷の母に寄せたもの、『詩と音樂』震災記念號に載つた。これらに十一年四月頃の作である「影」「母のこゑ」を加へた。

野茨の聲

「遠雷」「夏夜」は十二年八月の作で「遠雷」は十三年四月創刊の『日光』に載つた。その他は六七八月に亘つての作と思ふ。

白い黎明

「れがひ」は十二年二月の作で、『詩と音樂』三月號に載せた「清淨な孤獨」を改題改刪したもの。その他は同時の作で、「あかり」は『詩と音樂』七月號に載つた。

夜の霧の音樂

十一年十二月の作で、「靈性の芽」「夜の霧の音樂」は『詩と音樂』の新年號に、「歎息」「映像」「秘密」は『太陽』五月號に載つた。その他の詩は前章の諸篇と前後して出來た。

戀慕と夢想

前章と同時の作で、このうち「言葉」は『詩と音樂』新年號に、「月光と女と落葉」「隱れ家」は『太陽』五月號に載つた。たゞ「夢想」だけが十年九月頃の作である。

斷章

これも前章と同じく十一年十二月の作。二三後から附加したものもある。

傷心幽情

「焦心」は大正九年五月頃の作と思ふ。「小曲」と共に『詩と音樂』創刊號に載つた。「思ひ出」も「焦心」と同時代の舊作。「傷心」は十年九月頃の作。「江波の濵邊の」「あすの日も」「草寺に」「濵ひるがほ」は斷章から獨立させたもの。「螢」「涼雨」は十二年八月の作で、前記の四篇と共に十三年十月號

『日光』に載つた。

青き果

「雀の子」は十三年五月の作、『日光』七月號所載。「夏野」は十二年六月の作、『詩と音樂』七月號所載。「青き果」は十二年八月「遠雷」と同時の作、『日光』創刊號所載。「蛾」は十一年十二月の作、『詩と音樂』新年號所載。「春晝」は十一年六月頃の作。

秋の瞳

「ふるさと」は十一年九月の作、『詩と音樂』十月號に載つた。「この朝のなげかひは」は十二年六月の作、『詩と音樂』七月號に載つた。「內海」は震災のなり幾年ぶりに歸鄕して入海のほとりに歌つたもの、これは十三年四月

『日光』創刊號に出た。「海とこほろぎ」は十一年九月頃の作、「秋晝」は同じく十二月の作で『詩と音樂』新年號に出た。「秋のおとづれ」は十二年八月末、中野での作。その他はいづれも「海とこほろぎ」と同時の作である。

古風の窓

「山道」を除く長歌三篇は大正十二年四月の作で『詩と音樂』五月號に載つた。「日の暮れ」の出來たのが導因となつて、あとの二篇は白秋山房で徹夜した折りに成つたのである。「山道」は十三年五月の作、『日光』六月號に載つた。「旅」は十一年五月頃の作と記憶する。また「蹄のあと」は十二年四月の作で、『詩と音樂』五月號に、「春來れば」は五月の作で同じ雜誌の六月號に、「天の川」は十三年六月の作で『日光』七月號に載つた。

藤花追憶

この章はすべて北原白秋先生に捧げたものである。その時その時の感懷を私はかうした形に托した。今はみな涙ぐましくなる思ひ出である。「赤き屋根」「藤花追憶」の二篇は十三年五月頃の作で『日光』七月號に、「憂欝」は十一年十二月の作で『詩と音樂』新年號に寄せた。「赤き屋根」は小田原谷津に住つてゐた私の一頃の氣分である。後の作ではあるが。「藤花追憶」は知遇を受けて間もなく、道了山の小旅行に師のお伴をした、その時を懷しんで書いたものである。「憂欝」は小田原を引き揚げて東京に歸り、その年の暮れ間近かにゴミ〳〵した下町に佗しく住まつた時、小田原への鄕愁を歌つたものである。翌春、私は小田原の山房を訪れて、竹林の中の庵室に泊めて貰つた。その夜半に成つたのが「即興二篇」である。「丘の道をゆ

きて」も亦その折りの感懷である。

貧者の葡萄

「哀傷篇」「地のこゑ」は大正十一年九月「ふるさと」と同時の作。『詩と音樂』十月號に載つた。今から思ふと、その頃が詩作の上で最も息苦しかつた。

「貧者の葡萄」は十二年一月頃の作、「光の聖處女へ」は二月頃の作で、これは『太陽』五月號へ載つた。

昔日の歌

此章には舊稿の中から特にこれらの十三篇だけ拔いて收めた。何れも小田原以前の舊作で、中には今から七八年前の作さへあつて、元より今の私

としては頗る飽き足りないものである。それゆゑ最初この詩集には割愛するつもりであつたが、初期の詩に對する作者としての懷しみもあり、また一つには今の詩がどんな境地を通り拔けて來たか、その足跡をふりかへるよすがにもといふ心もあつて、旁々最初の意向を曲げた次第である。そのつもりで見て戴きたい。また、このうち「嫩草」は先年匿名で或る雜誌に書いた小曲を更に改刪し單純化したものなることを斷つて置く

このペンを措くに當つて、私は繰り返して言ふ。この詩集の主要なる作品は素描より始めて最後まで修業の道程を示した。今後は更に更に修業の難路であらう。私はこの第一歩に立つて、まづ何よりもそれを覺悟する者である。私の思慕する蒼空は、實に實に遠い。

大正十三年九月本文校了後

追記

北原白秋先生に私が負ふてゐる恩の深さはとうてい言葉には盡せないものがある。それさへあるに、今また斯くも懇切至らざるなき序文を賜つたことは寔に感激の他はない。記して感謝の微意とする。また先生は序文脱稿の當夜篤夫を招き、この歡びの夜を記念する爲めにとて醉後の奔放なるペンを呵して一氣に「篤夫三十態」を描かれた。この詩集に興趣を添へてゐるスケッチは、即ちその一つである。和氣靄々たる談笑の間に成つたこの戯畫めいたスケッチこそ、寧ろ何よりも私にとつては親しみ深い記念である。終りに、裝幀に恩地孝四郎氏を煩はしたことを多謝する。

大正十三年十二月二十九日

詩集

風・光・木の葉

目次

蜻蛉篇

風・光・木の葉……二

小曲……四

明日の花

茨の芽……八

青木……九

明日の花……一〇

明かる雲……一一

雪折れの竹……一二
雪後……一三
桐の枯木……一四
旅がへり……一五
芹の根……一六
小魚……一七
こぶしの花……一八
親しき花……一九
街道……二〇

見慣れた風景

見慣れた風景……二一
日没……二三
鶯笛……二四
竹馬……二五
柊の花……二六
八つ手の花……二八
曇り日……二九
冬薔薇……三〇
冬の菫……三一
朝茶……三二

むかし……三四
ぺんぺん草……三五
うぐひす……三六
珊瑚樹……三七
朝餉……三八

杉菜の頃

溝のあちら……四一
水馬……四四
野の羊……四六
ひなた……四八

影……四九
目醒め……五〇
遠い母に……五二
母のこゑ……五四

野茨の聲

遠雷……五六
良夜……五八
雨後朝景……六〇
五月……六二
憂鬱な散歩……六四

武藏野の雨……六七
旅愁……六八
野茨と蜜蜂の中へ……七〇
野茨の聲……七二

白い黎明

白鷺……七六
あかり……七八
ねがひ……七九
火……八〇
早春……八二

あたらしい木……八四

夜の霧の音樂

靈性の芽……八六
夜の霧の音樂……八八
月夜の雪……九〇
夜櫻……九一
凝視……九二
歎息……九三
映像……九四
祕密……九六

戀慕と夢想

言葉……一〇〇
月光と女と落葉……一〇三
夢想……一〇六
隱れ家……一〇八

斷章

一、せんだんの林にひそめば……一一三
二、憧れのこころ……一一三
三、貧しくて麥は食めれど……一一三
四、月の夜にきみとあへば……一一四

五、しみらにも……一一四
六、素馨のうつり香の……一一五
七、うつり香は……一一六
八、眞晝、われらの蓐となりし……一一六
九、せめて、蓬のにほひよ……一一七
十、月の夜に……一一八
十一、杉の實の緣……一一八
十二、はつこひ人は遠きゆゑ……一一九
十三、そよ風よ……一二〇
十四、光の薔薇よ……一二一

十五、螢よ、明れ……一二一
十六、かりそめに……一二二
十七、銀座舗道に……一二三
十八、いかがせむ……一二三
十九、濱の陽炎……一二四
二十、月夜の杜に……一二五
○廿一、秋のまひるに眼とづれば……一二五

傷心幽情

焦心……一二八
思ひ出……一三一

傷心……一三二
江波の濱邊の……一三四
あすの日も……一三五
草寺に……一三六
濱ひるがほ……一三七
螢……一三八
涼雨……一三九

青き果

雀の子……一四二
夏野……一四三

青き果……一四四
蛾……一四六
春晝……一四八

秋の瞳

ふるさと……一五二
この朝のなげかひは……一五四
内海……一五五
海とこほろぎ……一五六
秋晝……一五八
秋のおとづれ……一六〇

靜晝……一六一
草の實……一六二
秋の瞳……一六四
影……一六五
唄……一六六

古風の窓

野茨の道……一七〇
野あそび……一七二
日の暮れ……一七四
山道……一七六

旅……一七八
蹄のあと……一七九
春來れば……一八〇
天の川……一八二

藤花追憶

赤き屋根……一八四
卽興二篇……一八六
一、水仙
二、あかつき
憂鬱……一八八

藤花追憶……一九〇
丘の道をゆきて……一九三

貧者の葡萄

哀傷篇……一九六
櫻あかり……一九九
地のこゑ……二〇〇
○貧者の葡萄……二〇二
獨樹……二〇七
光の聖處女へ……二〇八

昔日の歌

風と葦切……二一四
薇草……二一七
滅びし戀の記憶……二一八
寂しき花嫁におくる……二二〇
影……二二三
蒼空の薔薇……二二四
海音……二二六
昔と今……二二〇
夜の虹……二二四

深夜の舞踏……二二八
闖入者……二四一
夜の唄……二四四
失戀祕章……二四七

風・光・木の葉

定價 貳圓

大正十四年一月二十二日 印刷
大正十四年一月二十五日 發行

著作者 大木篤夫

發行者 北原鐵雄
合資會社アルス代表者
東京市小石川區表町百九番地

印刷者 山本源太郎
東京市牛込區東五軒町四十四番地

發行所 東京小石川區表町一〇九 合資會社 アルス
電話小石川三五七〇番
振替東京二四八八八番

白秋詩集 全二卷

北原白秋氏著

日本詩壇に永遠不滅の光輝を放つ白秋氏の全詩集成る

詩壇の巨匠白秋氏の全詩集成る。收む る處純情涙を流すべき小唄あり、輕快 歌ふべき俗謠あり、天眞自ら成せる童 謠あり、法悅の歡樂境地を歌へる短 唱小曲あり、印象の筆觸、幽玄深遠なる象徵詩ある、自由奔放なる散文詩あり、各種の詩風交錯し渾然微妙の一大交響樂を呈す。詩壇嘗つて見ざる壯觀を形成し全篇百餘頁詩數六百餘本集の最近に至る全詩を網羅する空前の大二卷通卷一千三百餘頁の詩集に完成す。恩地氏の裝幀及扉の畫亦清麗無比藝術の士の愛誦すべきもの本集を措いて何を他に求めんや。

第一卷
- 青燈集（新作小唄俗謠等）
- 赤い鳥小鳥（童謠集）
- 大悲（眞珠抄、白金の獨樂等）
- 畑の祭（三崎詩集）
- 雪と花火（景物詩）

第二卷
- 邪宗門（象徵詩集）
- 思ひ出（抒情小曲集）
- 朱泥の馬（長篇詩集）
- 補遺

定價各冊貳圓八拾錢・送料各冊拾七錢

白秋童謠集 第壹卷

北原白秋氏著書

萬人翹望の標目であつた白秋氏の童謠全集第一卷が愈々刊行された白秋氏は實に童謠を復興し且つ之を完成せしめた日本童謠の父である。本集は繪入童謠集『トンボの眼玉』『兎の電報』『祭の笛』及英國童謠集『まざあ・ぐうす』を合卷せるもので、彼の華麗を極むる繪入童謠集を兒童のための讀本なりとせば本集は成人のため一般詩歌愛好者のための一大綜合全集である。上下三千年日本が初めて生んだ天成の童謠詩人白秋氏の作品を一貫して知らんとする人々は本書に依らるべきである。尙卷頭に童謠の本質と氏が創作の態度を宣明した長編の論文『童謠私觀』が附せられた。眞に童謠を知り童謠を味はんとする人々、童謠の正風と其典型を知らんとする人々に本書を薦める。

恩地孝四郎氏裝幀菊半截箱入美本

白秋童謠集 第貳卷 近刊

定價貳圓八拾錢・送料拾七錢

改訂 民謡集 日本の笛

本書は白秋氏の民謡寶玉集である。南方の情熱、北國の哀韻、都會情調の小唄等四百餘編が收められてゐる。

内容

岬の夕燒　五拾四章
島の燈明　五拾壹章
朝立つ虹　四拾五章
パパヤの花　四拾五章
椰子の日永　四拾六章
別れ霜　四拾壹章
草木瓜　參拾六章
朱欒の港　參拾八章
紫まつげ　貳拾四章
桑の葉　拾參章

華やかな夕燒、緣の燈臺、奔放な南風の港、三浦三崎の生活を歌つた雨に煙る城が島の磯、馬鈴薯の丘、畑の祭、三浦三崎の風物が歌はれた紅い椿と深碧の海、漁夫の生活、女の戀、八丈大島の情景が描かれた南海の絶島小笠原の哀調は西班牙、南洋の風を交へて鮮新である。美と神祕、麗光異光の生活を夢みて現實に破れたる作者の小笠原悲調。忘れ難き追分の古調、伊那や木曾、山野のそよぎそのままの北國哀韻。箱根、足柄、富士の裾野に燃え出づる草木瓜い、とし野山の風情が歌はれたザボン咲く南の國の港々のなつかしさ、博多古謡、阿蘭陀なまり小唄新曲都會の片鳴に住み。華やぎまれた菱るあはれなる人びとの歌。哀れな女工たちのために、特に作られた風の民謡工場唄である。

定價貳圓五拾錢・送料拾五錢

小唄と民謡 あしの葉

詩壇の王者白秋氏の小唄と民謡は實に天下一品で、何人の追從をもゆるさない。本書は氏が最近三年間の收獲を集めたもので純情涙すべき小唄、醇撲愛すべき民謡、眞に幽趣微韻を極むる珠玉の名作百八十餘篇が收められた。裝幀は森田恒友氏の筆になり清洒清新、近來稀に見るの美本なり。

竹林幽居

ひとりかくれた篁に、
茗荷もしろく香ににほふ。
醉ふてほろりとする目でも、
わしやさびしいぞ青雀

朝顏

今朝はとなりの藪に咲く、
花朝顏の小ささよ。
貧しい庭の花なれば
となりへ往つても小ささよ。

定價壹圓八拾錢・送料拾參錢

北原白秋氏著書

小唄集 白秋小唄集

歌ひ易く解し易く愛誦措く能はざる小唄二百餘篇を收む。附錄『さすらひの唄』『酒場の唄』『こん度生れたら』『カルメンの唄』『山の唄』『別れの唄』本文二度刷、絹繻子表紙袖珍判箱入極美本本書はその美しさ

城ケ島の雨

雨ぼふる、ふる、城ヶ島の磯に、
利久鼠の雨がふる
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。

抒情小詩 わすれなぐさ

懷しさ讀めば涙も溢れ出づべき白秋氏の抒情小曲を收めたものである。裝幀は山本鼎氏白金の光澤美しき絹繻子にクロバーと螢の模樣をあらはした瀟洒清新の趣は見るからに心躍る。

わすれなぐさ

面帛(おもぶく)のうしろに見へて、
その眸(ひとみ)にほふごとくも
空(そら)いろに透(す)きて、葉かげに
今日も咲くなわすれの花

定價各册壹圓八拾錢・送料各拾貳錢

北原白秋氏著書

詩歌の話 洗心雜話

詩や歌はどうして作るか、これは詩歌に志す人々の第一に知らんとする處であるが、幽趣微韻を極むる微妙な詩歌 機微を說きあかすといふことは、實に六つかしい事である。本書は詩歌壇の巨匠白秋氏が長い間の苦い經驗から體得された心境を、誰にも分るやさしい言葉で、詩歌を作るに何よりも大切な心の据ゑ方、感じ方、物の見方等を澤山の面白い例話をあげて說かれたもので、詩歌の根本藝術の極致がこの一卷に收められてゐる。詩歌の作り方を知らんとする人、眞に詩歌を味はんとする人々の一讀を薦む。

裝幀 恩地孝四郎氏

定價壹圓貳拾錢・送料拾參錢

作者別

萬葉全集

土岐善麿編

作者別に分類され現用假名交り體に書き換へられたる國寶萬葉集の現代的標準版

「萬葉集」は日本最古の古典として、日本歌壇の秘寶として果又世界文藝の驚異として萬人の必讀を要するものであるが、その特異な謂所萬葉假名の不便と煩さと編次の不完全なため、一般的のものとなり難き傾向があるのは遺憾の極みであつた。而して萬葉集の現代的の新整理は古典に對する最も意義ある一大事業として夙に一般の欲求した處であるが、而かもその計畫の餘りに大にして困難なため何人も著手し得なかつたものである。編者土岐氏、敢然として斯の編纂に心をひそめ前後八年の歳月を費し、苦心の下にこの難事業を完成し、茲に新代の新歌集として現代に寄與さるることになつた。全卷七百餘頁長歌、短歌、旋頭歌並に詩の一切を網羅し盡してゐる。

定價參圓八拾錢　送料廿三錢